

2015年
11月9日
月曜日

舟木 讓 教授（宗教哲学・キリスト教学）

「人間を考える」 —見えない世界へのまなび—

2011年8月の「障害者基本法改正」による「差別の禁止」における「合理的配慮」の追加に伴い、2012年6月、文部科学省高等教育局においても「障がいのある学生の修学支援に関する検討会」が開始され、「合理的配慮」の検討が始まった。

本学においてもこうした動きを受けてどのような取り組みをすべきかが検討され、今年度中にその具体的な規定等が決定される予定である。今後その規定を礎として、これから明らかになる様々な具体的な事柄の中でより合理的な対応を実践していくことが必要となってくる。

このような形で大学における「障害のある」学生らに、よりきめ細かな配慮をすることへの新しい一歩が始まるが、本学がこれまで紡いできた歴史の中で、本学での学びを経てすでに「障害のある」方々への様々な取り組みを行った方々が数多く誕生したことも忘れてはならない。特

に2015年はその一人である本間一夫氏の生誕百年にあたる記念の年である。

本間氏は1915年に北海道の増毛で生まれ、1920年の冬に脳膜炎に患したことによって視力を喪失され、「函館盲学院」で学んでいる際に、いずれも関西学院の卒業生である熊谷鉄太郎牧師と岩橋武雄氏（当時、関西学院大学教授）との出会いを経て、関西学院入学へと導かれ、また在学中に当時のベーツ院長より洗礼を受けてクリスチャンとされた方である。

卒業後は様々な苦勞ののち1935年東京に「日本点字図書館」を開設され、第二次世界大戦で焼失した後もその復興と発展に生涯尽力された方である。

その半生を自ら綴ったのが1980年に岩波新書として出版された『指と耳で読む—日本点字図書館と私—』である。そこには氏の幼

い頃からの歩みが記されているが、「見えない」ということが「当たり前」の世界を生きている人が存在している、という端的な事実を改めて気づかしめられ、そのことにあまり鈍感であることに恥じ入らされる思いとなる。

例えば、私たちが普段何気なく使う「色」に関する言葉もその「色」がいったいどのような雰囲気を持つており、どのような感情を誘引するのか、といった丁寧な表現がなければ視力を失った方には（中途失明だとある程度想像できるにしても）伝わらないという、当然の事実に対しても鈍感である。

「見えない世界」を生きるということへの想像力と共感がないところには、様々な「個性」を有している人々との真の共生は不可能であるということが改めて浮き彫りになる思いである。

ここから改めて問われるのは、私

たちが作り上げて来た世界・社会がそこに存在する多数派の人々の基準によって成立してきた、という事実である。そこでは少数者の日常は「特別」なもの、自らの努力によって多数派の考えに近づくことが当たり前と考えられてきた残酷な歴史が存在していると言える。

今ようやく「合理的配慮」というキーワードが公的に認知されることとなり、様々な背景・個性を有した（それは本来当たり前前の事実である）人々が真に共存する世界を実現する新たな時が始まったと言いうる。

本学が先駆的にそのことを実現する学びの共同体を形成しようとしてきた歴史に改めて気づき、そのことが有する意味に光を当てて、新たな歴史を紡ぐ一つのきっかけとして、本間氏の生誕100年を覚えることは意義のあることではないだろうか。